
SHUFFLE！～帰ってきた男～

黒い騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHUFFLE！〜帰ってきた男〜

【Nコード】

N5584Q

【作者名】

黒い騎手

【あらすじ】

少年は長い時を越えて戻ってきた。

それは妹達との大事な約束を果たすため……

それは妹達を不幸から救うため……

それは妹達を幸せにするため……

※これは原作にそって進みません。なのでそれが嫌な方は戻って頂いてけっこうです。

第1話（前書き）

この度新しく小説を書いてみようと思い立ち書き始めました。
おそらくgdgdになるのでそこそこはよろしくです。

ではよければよんでいってください。

第1話

光陽町、そこに一人の男がやってきた。

「ようやくと着いた。此処にあいつらが居るのか……待ってろよ。」

男はそう言って歩き出した。男の名前は「星見 宋」つい最近“この世界”に帰ってきたばかりである。

「さて貰った地図によると神王の家は……こっちか？」

宋はそう言って道の角を曲がった。少し歩くと和風な感じの家の前に着いた。

「地図通りならここのはずだが、って言わなくてもこの家は確実にあいつの家だな。」

案の定チャイムを押すとあいつこと神王ユーストマが顔を出した。

「はーい、どちら様だ？」

「酷いな俺の顔忘れたのか？」

「……な、なんでお前さんが此処に！？お前さんは七年前の事故で“死んだ”はずだろ！？」

予想通り神王は、かなり驚いている。まあ普通の反応だ。

「まあそのことについては家の中に入ってからでいいか？」

「お、おう」

そう言って神王は俺を家の中に入れてくれ居間まで案内してくれた。そしてソファ―に座ったとたん凄い形相で迫ってきた。

「お前は本当に生きてるんだな？」

「当たり前だろ。でなきゃ此処には居ないだろ。」

俺は、そう言って欠伸をした。

「でもお前さんはあの事故の中心にいた。そんな中でどうやって生き残ったんだ？そしてなんでお前さんの姿はあの時のまんまなんだ？」

「確かに中心にいた。そして俺は事故に巻き込まれて別の世界に飛んだ。」

俺はその後、順をおって説明していった。事故に巻き込まれ別の世界に飛ばされた事、そこでは時間が止まっていること、そして神獣に出会った事。

「そんな世界があったなんて驚きだな。」

「まあ知るよしもなかっただろうな。俺もはじめは驚いた。」

神王は、ようやくと落ち着きを取り戻してくれたらしい。

「まあそんな事より今はお互いまた会えた事を喜ぼうぜ?」

「そりゃそうだな!じゃあ今日は今から再会を祝して祝い酒といこうや!」

そう言って神王はどこからともなく一升瓶を出してきた。

「まったく・・・まあいいか。今日はとことんつきあうよ“親父”」

「おう!我が“息子”よ!」

数時間後・・・

「ただいま〜ってお酒くさ!またお父さん昼間から飲んでるの?」

そう言って玄関の方から足音がしてきた。

「だからお父さん昼間からお酒はやめなさいって・・・・・・・・・・」

「ようシア久しぶり。元気にしてたか?それにしてもずいぶんと美人になったな〜」

「へ・・・・・・・・・・」

シアは驚きのあまり動かなくなってしまっているようだ。

「お〜いどうした?お兄ちゃんの顔を忘れちゃったのか?」

俺はそう言いながらシアの顔の前で手を振ってみた。そうするとようやく我に返ったらしく俺の顔をじっと見てきた。

「え、だってお兄ちゃんは事故で死んで」

「なかった。」

「じゃあなんで昔と同じ姿なの」

「それはちょっと事情があってな。」

「本当にお兄ちゃんなの？」

「それ以外の何に見える？」

そう言うときシアは泣き出してしまった。

「お、おいシアなんで泣いてんだ!？」

「あ、宋てめえシアを泣かせたな!」

「うつせえ、ちょっと黙ってろよ!で、シアどうしたんだ?」

俺はそう言ってシアの頭を優しく撫でてやった。そうするとシアはいきなり俺に抱きついてきた。

「つと、いったいどうしたって言うんだシア?」

「だって、だって……」

「そうかそうか、大丈夫お兄ちゃんは此処に居るぞ。」

「……うん。」

シアはそうやって俺に抱きついたまんま泣き続けた。しばらくするとシアは泣き疲れたらしく寝てしまった。

「さてと、シアを部屋に運んでくるわ。」

俺はそう言ってシアを部屋に運んだ。そして俺はシアを運びベッドに寝かせてベッドから離れようとしたとき俺は腕を寝かせたはずのシアに捕まれた。

「まったく今まで何してたのよ？」

「いやちよっとな、それにしてもお前も元気そうだな。」

「まあね。」

俺が今話しているのはシアの中に居るもう一人のシア（裏シア）だ。

「とりあえずどっちも元気そうで俺は安心した。」

「たく、あんたが死んだって聞いた後シア落ち込んで酷かったのよ。」

「そうかそれはすまなかった。」

「ホントによ。」

「まあおかげでお前らとの約束が後少しで果たせそうだ。」

「え？それって小さいときしたあの約束？」

裏シアは少し驚きながら俺に聞いてきた。

「ああ、俺を誰だと思ってるんだ？俺はお前らのお兄ちゃんだぜ。信用しろって。」

俺はそう言ってまた頭を撫でてやった。

「う、うん。」

裏シアは少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら俯きながら言った。

「じゃあ今は少しシアをねかせてやってくれ。」

「そうする。・・・もう何処にも行かないわよね？」

「当たり前だ。俺の居場所は此処だからな。」

俺はそう言ってシアの部屋を出た。その後、俺は神王の元に戻ってまた飲み始めた。

次の日の朝、俺の目覚めは最悪であった。昨日の飲み過ぎで二日酔い、さらに神王とさんざん喋っていたので喉が哽れていた。俺は起きてすぐに水を飲み、台所に行った。

「あ、おはよう。」

俺が台所に入るとそうシアが言ってきた。

「おう、すまん。水一杯貰えるか？」

俺はそう言って食卓の空いているところに座った。

「宋か、おはよう。」

「おはよう。なあ親父は二日酔いじゃねえのか？」

「あれぐらいで二日酔いになんぞなるかってんだ。」

「はい。お兄ちゃん水だよ」

「お、ありがとう。」

俺はお礼を言ってシアから水を受け取った。

「ところで宋、話があるんだが。」

「ん？」

「お前、今日から学校へ行け。」

「ぶっ！」

俺は親父に向かって水を吹いてしまった

「おい！いきなり何言ってるんだ。おかげで水吹いちまったじゃねえか！」

「そんないきなりでもないだろう？お前はまだ歳は17歳だろう？なら学校に行くべきだ。もう学校の方には話はつけてあるから。ちなみにシアと一緒に学校だ。名前はバーベナ学園ってとこだ、そこにはシアの許嫁候補の稟殿も居るから会っておいてくれ。」

親父は俺がかけてしまった水を拭きながら俺にそう話した。

「で、でもだな。俺はあっちで10年は過ごした。だから実際年齢的には27だ。そんなんが高校に行っても……」

「え！？お兄ちゃんもバーベナ学園に通うの！？」

シアはそう言って俺の元に駆けつけてきた。

「そうだぞシア。今日から宋も一緒にバーベナ学生だ。」

親父はシアのその姿を見て嬉しそうに言いやがった。

「やったー！！今日からずーっと一緒だね！」

シアは嬉しそうにこっちを見て言ってきた。クソ、そんなに喜ばれたら行くしかないじゃないか。

「しゃあない、行くか学校に……」

シアはそれを聞くとルンルン気分で朝食の準備に戻っていった。ま

ったく、どれだけ俺と一緒になのが嬉しいんだ。まあシアの許嫁候補を拜めるのはいいことだな。

「シアが喜んで良かったな。」

親父は俺にニコニコしながら言っけやがった。確信犯かこの野郎。

「そうですね、”神王様”」

「な!？」

親父もとい神王様はガタツと音を立てながら立ち上がった。

「い、いくらなんでもそれはないんじゃないか？」

「なにがですか?”神王様”」

俺はさらに追い打ちと言わんばかりに呼んでやった。

「親父って呼んでくれよお」

神王様はそう言って俺に抱きついてきた。朝から暑苦しいことこの上ない。

「暑苦しいので離れてください。”神王様”」

「グフツ!!」

そう言って神王様は倒れた。どうやら止めをさしてしまったらしい。まあ当然の報いだな。

「あれ？お父さんどうしたの？」

シアが朝食を持って来た。

「気にしないでいいぞ。それより早くご飯食べようぜ。」

俺はシアにそう言って朝食を始めた。シアは首をかしげながら俺と一緒に朝食を取った。

「じゃあ先に行ってるな。」

「うん。じゃあ後でね。」

俺はそう言って家を出た。今日は転校初日と言うことになるので早めに行っているいろとすませなくてはならないのでシアより早く家を出た。

「さてさくさく行くとしよう。」

俺はそう言い歩き出した。そして数秒で立ち止まった。

「ん？この家は・・・そうか魔王の家か。ずいぶんと近いな。まあ帰ってきたら挨拶に行くか。」

俺はそう言ってまた歩き出した。まあ親父と魔王は仲が気持ち悪いくらいにいいから家が近くても不思議ではない。シアが「リンちゃんも一緒にバーベナ学園に通ってるんだよ。」と言っていたので納

得だ。それに話によるとリンちゃんことネリネの許嫁候補もシアと同じ土見稟だそう。随分とモテるのだな土見稟と言う男は、会うのが楽しみになってきた。はてさてそんなことを考えてるうちにバーベナ学園に着いてしまった。迷わなかったかって？場所は前もって聞いていたし何よりシアに地図をかいでもらったからな。

「さて、じゃあまずは職員室にでも行きますか。」

俺はそう言って校門を越えて校舎の中に入っていた。

「職員室はどっちかな？」

俺は迷っていた。方向音痴ではないのだがいかんせんこの学校が広いので職員室に辿り着けないでいた。

「困った・・・困ったぞ。どこかに人が・・・いた！すみませーん！」

「はい？どうかされましたか？」

俺は少し遠くにいた神族の女の子に声をかけた。

「あの、職員室はどっちかわかりますか？」

「それなら、その角を曲がってちょっと行ったところにありますわ。」

「ありがとうございます。」

俺は女の子にお礼を言ってから走った。

「お、ここが職員室か。危うく通りすぎるとこだったぜ。」

そう言いながら俺は職員室に入った。

「失礼します。今日から此処に通う事になった星見です。」

俺が職員室に入ってそう言うのと女の先生がこっちに歩いてきた。

「お前が星見か、私はお前のクラス担任の紅薔薇 撫子だ。よろしくな。」

「はい。よろしくお願いします。」

その後、俺はこの学園の説明を受けているとチャイムが鳴った。

「じゃあ朝のショートの間だから行こうか。」

「わかりました。」

そう言って歩き出した先生の後ろに俺はついていった。

「では、私が呼ぶまで此処で待っていてくれ。」

クラスの前について俺は紅薔薇先生の言うとおりに待っていた。クラスの中はがやがやと騒いでるようだった。しかし紅薔薇先生の「静かにせんやつはグラウンド20週させるぞ!」と言う一言によって静かになった。どんだけ恐ろしいんだあの先生は。

「入ってこい。」

しく。」

緑葉はそう返してきた。なんだこいつは？随分と態度があれだな。ただの女好きなのか？俺がそんな事を考えていると教室の後ろのドアがガラッつと音を立てあいた。

「すみません！お、遅れました・・・ってお兄ちゃん此处で何してるの！？」

入ってきたのはシアだった。そしてシアは俺がこのクラスに居るのに驚いているようだった。

「遅刻かシア？だらし」「ええー！ー！ー！ー！！！！」「」「うるさいな。まったく」

そしてクラスに今日2度目の叫び声が響いた。

第1話（後書き）

感想、修正点随時募集中です。

主人公設定&世界観（前書き）

今回は設定を書きました。

主人公設定&世界観

オリ主人公設定

名前…星見^{ほしみ} 宋^{そう}

性別…男

種族…人

好きな物…シアの作るご飯、家族（特に妹達）

嫌いな物…シアをいじめる奴、しつこい奴

性格…

基本どんな奴にもオープンな感じで接している。だがシアをいじめたりする奴には容赦がない。どちらかというとシスコンに近い感じがする。

設定…

5歳の頃に俗にいう神隠しにあって神界さまよっているところを現神王ユーストマに見つかり引き取られた。その後は養子になり一緒に暮らしていた。頭が良く神童と呼ばれおりユグドラシル計画に参加していた事もある。なのでいちおプリムラの事も知っている。そしてある時シアの中にもう一人のシアがいることに気づきそれを分離しようと研究していた。しかし実験中に魔力の暴走により行方不明になっていた。実際は神界を作ったと言われる最初の神王が作った世界に飛ばされていた。そこでは全ての時間が止まっており、そこで研究をしていた。そこでの研究中に神獣^{ソラ}に出会い、気に入られ

て元の世界に戻して貰えることになった。現在ソラは「お前と居たらおもしろい事がありそう」と言うことで着いてきている。

オリ神獣設定

名前…ソラ

性別…女

種族…神獣

好きな物…おもしろいこと、宋

嫌いな物…堅苦しいこと、暗い奴

性格…

どんなこともプラス思考に考える明るい性格。だがそれが行きすぎて破天荒な時がある。

設定…

神界を作ったといわれる最初の神王に作り出された存在。神獣は複数体存在しているが全員が別々に生きている。ソラは数年に1度自分が生まれた場所（宋が飛ばされた世界）に来ていた。そんなときに宋と出会い、気に入って一緒に居ることにした。普段は鳥の姿をとっている。

世界観…

いちおEssence+の世界観でキャラも登場させます。主人公はソラの力を借りていつでも飛ばされた世界に行くことができます。宋が飛ばされた世界とは原作ではデイジーが行く世界のことです。

主人公設定&世界観（後書き）

今回は設定を書かせて頂きました。
追加したり変更したりするかもしれませんが。

第2話

「すみません！お、遅れました……ってお兄ちゃんここで何してるの!？」

「遅刻かシア？だらし」「ええー！ー！ー！！！！」「うるさいな。まったく」

さすがに2回目の叫び声はうるさかった。まあ仕方がないか。

「星見君ってシアちゃんのお兄さんだったの!？」

そう驚きながら話してきたのは貧n・失礼、オッドアイの魔族っぽい子が話しかけてきた。

「え？あ、言ってなかったっけ？」

「言っていない……」

俺がそう言うところとあきれたようにその子は返してきた。しまった言い忘れてたか。

「おお、お兄様さっきはそうとは知らずご無礼を働きました。どうぞお許しください。」

そう言って緑葉が俺の手を手を取ってきた。この男はなんなんだ？さっきはあんな態度を取っておきながら今はこの状態か？

「気持ち悪いからとにかく離してくれるか？」

俺はそう言って手を振り払った。

「これはこれはすみませんでした。私は緑葉樹、以後お見知りおきを。」

緑葉は、そう言うとお辞儀してきた。

「緑葉君の事はいいから、話をきかせて欲しいんだけど？」

とさっき話しかけてきた女の子が言った。

「いいけど、君の名前は？」

「いいわすれたわね、私は麻弓Ⅱタイムよろしくね。」

そう言って麻弓ちゃんは手帳らしき物とペンを出した。

「稟君、シアちゃんにお兄さんがいたなんて聞いていましたか？」

「いや聞いてないけど。ネリネは？」

「私も聞いていませんわ、稟様」

俺は少し離れたところでしているの会話を聞き逃さなかった。

「貴様ら・・・・・・・・いい加減にせんかーーーー！！！！！」

何の前触れもなく紅薔薇先生が怒った。

「転校生に興味がわくのはいいが今はまだ朝のショートだ。聞いた
い事があるならあとでにせい!!」

紅薔薇先生の一言によりこの状況は終わりを告げた。そしてその後
は全員が自分の席に着き朝のショートがつづけられた。

「（あれが土見稟か・・・そしてあの子は・・・）」

俺は朝のショートの間ずっと土見を眺めていた。そして朝のショ
ートが終わり紅薔薇先生が教室を出て行くとみんなが一斉に俺のこ
ろに集まってきた。

「じゃあさっきの続きなのですよ♪」

そう言って麻弓ちゃんはまた俺にいろいろと聞き始めた。それは授
業が終わることにあり少し疲れた。そして気づいたら昼休みになっ
ていた。

「さて昼はどうしようかな？」

俺が昼食をどうしようか悩んでいるとシアがこっちにやってきた。

「お兄ちゃん、お昼作ってきてるから一緒に屋上で食べない？」

「お、そうなのか？じゃあ一緒に食べようかな。」

俺はそう言ってシアについて屋上まで行った。

「はい、これがお兄ちゃんの分ね。」

「おう、ありがとな」

俺はシアから弁当を受け取り食べ始めた。シアはというと土見の近くで食べ始めた。土見の近くには朝話していた女子二人に、上級生と思われる女子二人に緑葉と麻弓ちゃん、そして

「何で……プリムラがいるんだ？」

そう、プリムラがいたのだった。確かに学校内に大きな魔力を持っていた奴がいるなどとは思っていたが、まさかそれがプリムラだったとは。

「こんなところにいて大丈夫なのか？」

俺は弁当を食べながらぼつんとそんなことを漏らした。

『大丈夫じゃないか？魔力も安定してるし、何より楽しそうじゃないか。』

と頭の中に声が響いた。ふと隣を見るとそこにはソラがいた。

「お前いつのまに……まあそんなことより本気でそんなこと言ってるのか？暴走すれば日本ふきとばしかねないんだぞ？」

俺は弁当のおかずをちよつとソラに分けながら話した。

『さっき言った通り魔力は安定している。』

そう言いながらソラは俺が分けたおかずを食べていた。するとプリムラがこっちを見て何を思ったのか近寄ってきた。

「どうしたんだい？」

俺は近寄ってきたプリムラに話しかけた。

「……どこかで会ったことある？」

プリムラは首をかしげながら俺にそう聞いてきた。確かにプリムラとは会ったことがある。だがそれは俺が事故に遭う前、つまり10年以上前になる。覚えていなくても当然だ。

「どうしたプリムラ？」

そう言って今度は土見が近寄ってきた。

「……この人に会ったことあるような気がした。」

「そうなのか？」

土見はそういう俺を見てきた。土見の後ろを見ると一緒に食べていた奴らがみんなこっちに來ていた。

「どうも土見稟君。話すのははじめてだね。同じクラスだからもう知っているだろうが俺は星見宋、いちおシアの兄貴だ。」

俺は立ち上がり自己紹介をした。

「ど、どうも初めまして。」

どうやら土見はとまどっているようだ。まあ仕方ないだろう朝の話を聞いているとシアは俺の事を誰にも話していないようだったしな。

「え？ シアちゃん、お兄さんが居たの？」

そう緑色でショートヘヤーの女の子がシアに聞いていた。

「うん。ちょっと事情があつてしばらく離れてたんですけどね。」

シアは質問に答えた。

「へえ、そうなんだ。えっと僕は時雨亜沙よろしくね。」

緑髪の子は俺にそう言ってきた。

「はい、これからよろしくお願いします。 亜沙先輩」

俺はそう挨拶した。その後は次々に自己紹介されそれに答えていった。そして一通り終わったところで再度昼食を取り始めた。今度は俺も土見の近くで食べていた。ソラはいつの間にかどこかへ行ってしまった。

「で、なんでシアちゃんのお兄さんなのに同じ歳なの？」

と、唐突に亜沙先輩が聞いてきた。

「えーっとそれは話すと長くなるんですけど、聞きます？」

俺はちよつと困りながら聞いた。

「興味があるから聞きたいな。」

「私も知りたいです。」

「親友の事は知っておきたいです。」

「私もそのことについては聞いてなかったから聞きたいな。」

亜沙先輩、楓ちゃん、リンちゃん、麻弓ちゃんの順で言われた。まあそこまで言うなら話すか。その後俺はソラの事は伏せて話をした。

「ってことは私たちより実際は年上なの？」

「まあそういうことになりますね。」

俺は淡々とはなしていた。まあ隠すことでもないですから。

「じゃあ私たち宋さんとかそんな感じで呼んだ方がいいんですか？」

楓ちゃんがそう俺に聞いてきた。

「いやそんなことはないよ。好きなように呼んでくれて構わないから。」

俺はそう返した。まあどんな風に呼ばれてもいいからね。

「じゃあ俺はお兄様と「はいはい、緑葉君は黙っててね」ムグムグー！」

緑葉は見事に簀巻きにされた。なんと手慣れているんだろうか麻弓ちゃんは。

「まあお兄ちゃんは基本ラフな感じだから特に気にしなくてもいいよ。」

シアがそう言うともみんな安心したようだった。

「ま、そういう事だから好きなように呼んでくれ。俺もそうさせて貰うから。」

俺は食べ終わった弁当箱をシアに渡しながらそう言った。

「それと土見稟、君にはとても期待してる。というかシアを不幸にしたら男として生まれてきたことを後悔させてあげるよ。」

俺は笑顔で土見に話しかけた。

「う、うっす。」

土見は俺に気圧されたようで少し顔を引きつらせていた。

「もうお兄ちゃん、稟君をいじめないで!!」

俺を見てシアはそう怒った。

「ごめん、ごめん。ちょっとからかいたくなっただけだよ。まあ稟君、どんな選択をしてもそんなことはしないから安心してくれ。それと相談にはいつでも乗るからいつでも頼ってきてくれ。」

俺はさっきとは違う笑みを浮かべながらそう言った。

「は、はい。宋さん」

稟君はちよつと安心したようにそう言った。こんな感じでいろいろな話をしているうちに昼休みが過ぎていった。

「じゃあみんな気をつけて帰れよ。」

紅薔薇先生がそう言って教室から出て行き今日の学校が終わった。

「じゃあ帰ろうかな。」

俺はそう言って鞆に荷物を詰めて帰ろうとした。だがそこにシアが近づいてきた。

「お兄ちゃん、今日このあと時間ある？」

「どうした？まあ予定はないが。」

シアが話を聞くとどうやらこのあとフローラという店で俺の歓迎会をするらしい。

「そうか、せっかくだから行こうかな。」

「わかった。じゃあ玄関で待ってて。」

シアは麻弓ちゃんの元に駆けていった。俺はシアの言葉通りに玄関に行った。

「歓迎会か……」

『なんだい？嬉しそうじゃないか？』

「まあ嫌いではないからな。」

俺は玄関につき、外に出てソラと話しながらシア達を待っていた。

『そういえば言い忘れていたが、この学校に俺と同じ存在の奴が居る。』

「ほう、つまりこの学校にはもう一匹神獣が居ると？」

『そういうことだ。』

ソラは校舎を見つめながらそう言った。

「どうした？会いたいのか？」

『できればな。だけど無理して会うほどでもないかな。どうやら妹が来たようだじゃあまた後で。』

「ああ、夕食時にでも」

そう言ってソラは飛んでいった。

「今の鳥なんか変じゃなかった？」

シアが俺の元に来てそう聞いた。

「そうか？それより早く行かないか？」

「うん、そうだね。」

俺はそう言って歩き出したシア達の後ろについて行った。

「じゃあシアちゃんのお兄ちゃん、の帰還と転校を祝ってかんぱーい
！！」

「「「かんぱーい！！」」」

麻弓ちゃんが音頭とり歓迎会が始まった。参加者は稟君と土見ラバーズ、緑葉に麻弓ちゃんだ。

「パフェおかわりー！」

「はや！」

開始30秒足らずで麻弓ちゃんがパフェをおかわりした。いくら何でも早すぎではないだろうか？

「麻弓ちゃんはいつもあんな感じだよ。」

シアは笑いながら俺に話しかけてきた。

「太らないのか？」

「それが太らないんだよね、うらやましいよ。」

シアは苦笑いしていた。

「さてじゃあ俺も歓迎会を堪能しますか。」

俺はそう言って目の前にある料理に手をつけた。

「はい。お飲み物ですわ。」

そう言って俺にウェイトレス姿のカレハ先輩は飲み物をくれた。

「あ、どうも。カレハ先輩は此処でアルバイトしてるんですか？」

「そうですわ。あとカレハとお呼びください。」

「え？でもいちお・・・」

「いえ、かの神童とうたわれた宋さんに会えて光栄ですわ。」

カレハ先輩はそう言ってきた。

「なんだ知ってたんですか、俺の事。」

「はい、思い出したのはついさっきですけど。」

そう俺は神界にいたころ神童をもてはやされたことがあった。どうやらカレハ先輩はそれを覚えていたらしい。

「それに年上の方に先輩をつけられるとなんだか違和感が・・・」

「わかりました。じゃあこれからはカレハと呼ばせて貰いますね。」

「はい。」

俺がそう言うとかレハは嬉しそうに笑った。

「そう言えば今日の朝はありがとうございました。」

「いいえ、あれくらいなんて事はありませんわ。」

そうなのだ、学校で朝職員室を探しているとき出会った女子はカレハであつたのだ。

「それにしてもシアちゃん本当に嬉しそうですわ。」

「そうですか？俺にはそんな感じには見えませんけど？」

「いいえ、前よりも笑顔に輝きますわ。」

俺はそう言われシアを見た。だがよくわからない。まあしばらく会っていなかったからわからなくてもしょうがないか。

「じゃあ私は仕事に戻りますわ。」

「はい、仕事頑張ってくださいね。」

カレハは仕事に戻っていった。その後はみんな結構どんちゃん騒ぎをし解散となった。会計は何故か俺が一番年上と言うことで払わされた。あれ？俺の歓迎会じゃなかったっけ？

「よっとソラいるかい？」

俺は夕食後、庭に出てきた。

『ここにいる。』

そう言ってソラはどこから飛んできた。

「ほらこれ、夕食の残りだけど。」

『ありがとう』

俺は持ってきた夕食の残りをソラにあげた。

「さて例の計画だけど、もう少し先になりそうだ。」

『どうした？戻ってきたらすぐにでも始めるんじゃないのか？』

「いや、術式を見てみたら間違っていた点が見つかってなそこを修正するのに時間がかかりそうなんだ。」

『そんなことこっちに来る前にちゃんと確認しておけよ。』

「いやはや、俺としたことが情けない」

『まあいい、時間はまだある。』

ソラは夕食の残りを食べ終わり俺の肩に乗ってきた。

「そうだな時間はまだある。だが急がないと・・・・・・・・」

俺はそう言って夜空に浮かんでいる月を眺めた。

第2話（後書き）

ようやく1日が終わりました。
なんか長かった感じがします。

第3話（前書き）

久しぶりの更新……
こんなに放置して俺はいつたい何をしているんだ……orz

第3話

あれから数日がたった。俺もなんとかこのクラスに馴染んできた。最初の方はみんな俺がシアの兄貴だということでも遠慮がちだったが麻弓ちゃんや緑葉がいつも話しかけてきてくれたおかげかみんなそれなりに話しかけてきてくれるようになった。そして1つわかったことがある。それは……シアの親衛隊、SSSなるモノが存在する事だ！しかも噂を聞く限り何かにつけて稟君を追っかけ回し抹殺しようと企んでいるらしいじゃないか！これはほっとけない。将来シア達の婿になる人をここで抹殺されては困る。そんなこんなで…………

「お前ら……………覚悟はできているんだろうな？」

俺の前には朝から稟君を追っかけ回していたSSSとその他の親衛隊だ。

「な、なんで貴方様がここに居るんですか!？」

とSSSの隊員らしき男子が俺にしゃべりかけてきた。どうやら他の隊員達も驚いているようだ。

「なぜって？そりゃあ妹の婚約者を抹殺しようとしている輩を滅する為にここにいるんだ。」

「お兄さんは、妹の事を奪おうとする不埒な男が許せるんですか!？」

俺は前もって持ってきた背丈ほどある棒を構えた。そして…

「俺は妹が幸せならそれでいい！そして俺も事を貴様等が兄と呼ぶな！轟け！俺の槍――！！！」

こう叫びながら棒を槍に見立てて天高く投げ放った。そして星になった棒は凄い勢いで親衛隊達がいる所に落ちてきて轟音とともに地面に突き刺さった。そして隊員達は棒が突き刺さったときの衝撃により吹き飛び、あとに残ったのは直径3メートル程のクレーターのみだった。

「やっぱ父さんのより威力がないな……もっと修行しろ。」

「あ、あのお兄さん？」

そうしゃべりかけてきたのは物陰に隠れていた稟君だった。

「ん？なんだい？それより無事だったかい？」

「あ、はい。いやそんなことよりやりすぎじゃないですか？」

どうやら稟君は俺がやったことの方が心配のようだ。

「いやいや、これぐらい普通だろ。」

「普通ではないかと……」

「まあそんなことはどうでもいい。それよりこのままでは授業に遅れてしまう、さっさと行こう。」

俺は稟君を急かし教室に戻った。そして俺はこの後言うまでもなく紅薔薇先生とシアからこっぴどく叱られた。

「そして早くも昼だ。授業風景を書かないのか？書いたってしかたがないでしょ。」

「誰に言ってるのお兄ちゃん？」

「何でもないよシア。」

今日も昼は屋上に来ている。そしていつも通りにシアから弁当を受け取り食べようと思った時であった。俺は手を滑らせフタを開けたばかりの弁当を落としてしまった。

「シアが俺の為に作ってくれた弁当が……」

全くもってやらかしてしまった。俺の楽しみであるシアの弁当を落としてしまうなんて。

「ダメだ……もう今日を生きていける気がしない」

俺がものすごく落ち込んでいると稟君が近寄ってきた。

「そ、そんな落ち込まなくてもいいじゃないですか。」

「シアが作ってくれるご飯は俺の人生の中で唯一の楽しみと言っても過言ではないのだよ稟君、それが君にはわかるかい？」

「わ、わかんないです。」

「だろうな。どうせわかるはずもないんだよ……」

俺はさらに落ち込んだ。もうこの屋上から飛び降りたい気分だ。

「お兄ちゃんそんなに落ち込まないで、今日の夜はお兄ちゃんの好きなもの作ってあげるから。」

シアが近寄ってきてそう言ってくれた。

「本当にか！？じゃあじゃあハンバーグが食べたい！」

「うん。わかったよ。」

「よっしゃー！！！」

俺はシアの言葉に舞い上がりガッツポーズをした。周りの目が辛いがそんなことは気にならない。

「じゃあ今日は学食で我慢するか。また後でなシア、稟君。」

俺はそう言い残し学食へと向かった。

「さてどこに座ろうか。」

俺は学食に来て日替わりランチを持って座る席を探していた。

「お、あの子は」

俺はある女の子見つけその子の座っている席に近づいた。

「相席いいかな？」

「あ、はい。どう………」

女の子は俺の姿を見て絶句した。

「相席いいかな？」

俺は女の子に向かって再度聞いた。

「は、はい！どうぞ宗様！」

「そんな固くならなくていいよマツリちゃん。おっと、学校では瑠璃ちゃんの方が良かったんだっけ？」

俺はそう言いながら瑠璃ちゃんの前の席に座った。

「はい。学校では瑠璃の方が…」

「そうか、じゃあ次からは気をつける事にするよ。」

俺は話しながらご飯を食べ始めた。そう俺の前に居るのは瑠璃Ⅱマツリちゃん、シアの護衛をしてくれている神王直属の親衛隊の子だ。最近は稟君の事も護衛しているそう。

「あれ？宗様は今日も屋上でシア様達とお食事をされていたのでは？」

「それがね、シアから渡された弁当をあらうことか落としてしまつて。それと様はいらないよ。」

「いえ、そういう訳にはいきませんので。」

「俺、様とかつけられるの苦手なんだけどな……」

そう言つて俺はちよつと落ち込んだ風に見せた。

「うっ、で、ではどのように呼べばよろしいでしょうか？」

お、どうやら俺の作戦に上手く引っかけたくれたようだ。

「そうだな……宗君なんてのはどうだ？」

「さすがに年上の方に君付けは……」

「えゝつまんない。じゃあさんでいいや。」

「それならなんとか。」

俺的には宗君と呼ばれてみたかったんだが仕方ないか。

「それにしても瑠璃ちゃん、可愛くなつたね。」

「い、い、いきなりなにを仰るんですか!？」

「いや、だってさゝ最後に会ったのは瑠璃ちゃんが8才の時でしょう。あの頃に比べるとかなり綺麗になったよ。」

瑠璃ちゃんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。ちよつと言い過ぎたかな？

「それにあの頃より剣、かなり上手くなってるでしょ？こう見ていてもスキが無いね。」

「はい！小さい頃に宗さんから教わった事を忘れずに毎日精進してきましたから！」

「俺が教えたのは基礎だけけどね。」

「いえ、基礎こそが大切なんです。宗さんが教えてくださった基礎がしっかりしているから今の私があります。」

「そんなに言われると照れちゃうな。」

俺は頭をポリポリ掻きながら答えた。

「そんな照れないでください。貴方は私の目標であり憧れなんですから。」

「俺なんて憧れるもんじゃないでしょ。」

「そんなご謙遜を私には宗さん以上の方はおられません。」

「そんなことないって。俺なんかより立派な人はいっぱいいるだろ。」

俺はそう言いながら食べ終わった食器を持ち席から立ち上がった。

「いえ、私は…「じゃあ俺はこれで行くわ。これからもシアの事頼んだ。」……はい。」

俺はそう言って瑠璃ちゃんの頭をポンポンとはたくように撫で席から離れていった。

「貴方以上の方なんて私には……………」

最後の瑠璃の眩きは宗に届く事はなかった。

「これで今日の授業を終わる、このまま帰りのシヨートをしたいと思う。」

今日最後の授業は紅薔薇先生の世界史であったため授業が終わりそのまま帰りのシヨートとなった。

「明日も特になし、いつも通りの授業だ全員遅刻せんように。遅刻した者には重り付きでグラウンドを20周してもらうからな。では解散!」

紅薔薇先生はそう言い残し教室から出ていった。

「やっと今日も1日終わったっす」

シアが腕を伸ばしながら言った。他の生徒達も紅薔薇先生が出ていったと同時に帰り支度を始めたり「この後どこに行く？」などとそれぞれ行動を始めた。どうやら稟君達はまっすぐに家に帰るらしい。俺も今日はまっすぐ帰る事にしようかな。

「お兄ちゃん、ちょっと買い物に付き合ってもいいんだけど？」

とシアが話しかけてきた。

「いいぞ。けどなんか買うもんあったっけ？」

「もう忘れちゃったの？今日はハンバーグ作ってあげるって約束したでしょ。」

「そうだった！アブねー完全に忘れてた。」

本気で夕飯のこと忘れてたぜ。危うくシアの絶品ハンバーグを食い損ねるところだった。

「という事だ。稟君すまんが今日はシアをかりるな。」

俺はそう突然稟君に話をふってみた。

「え、あ、はい。全然大丈夫です。」

どうやら突然話をふられて慌てている。

「大丈夫？まだシアを稟君にあげた覚えは無いんだがな？」

「す、すいません！」

稟君は俺の言葉を聞き慌てて謝ってきた。

「もう！お兄ちゃん！稟君をからかわないで！」

「ははは、すまんすまん。稟君許してくれ。さてじゃあ行くか、買い物に。」

稟君をからかっているとシアに怒られてしまった。なので早々に退散することにして俺は教室をでた。

「あ、ちよつと、待ってよお兄ちゃん。」

シアはそう言って俺の後ろからおかつけてきた。

「まったく少しは落ち着いて行動してよ。」

「だって今晚はシアの作ってくれるハンバーグだぜ。これが落ち着いていられるもんですか！」

「それにしてもお兄ちゃんはハンバーグ好きだよねー。」

「当たり前だ。シアが俺の為に覚えてくれた最初の料理だからな。」

そうなのだ。ハンバーグはシアが俺の為に覚えてくれた料理なのだ。昔、研究から疲れて帰ってくる俺に美味しいモノをといたことでシアが覚えてくれた俺の好物。帰った時にハンバーグがあったときのあの時の感動は今でも覚えている。

「そういえばそうだったね。」

シアは思い出すように呟いた。

「なんだ忘れていたのか？まあそれも仕方ないか。シアの頭の中は稟君の事でいっぱいだろうからな。でも家族の事も少しは考えてくれよ？そうしないとお兄ちゃん泣いちゃうぞ？」

俺は泣く真似をしてみせた。

「そ、そんな事はないよ！ちゃんとお兄ちゃんやお父さん、お母さん達の事考えてるよ。」

「そうか？ならいいんだけどな。じゃあさっさと買い物して帰りますか。」

俺はそう言って足を早めた。

「もうちょっとゆっくり行こうよ。」

シアはそんなことを言いながらもしっかりと俺についてきてくれた。

「(まったくよくできた妹だ。こいつらの為にも早くしなくちゃな。)」

「何か言った？」

「いや、何も言ってないぞ。」

「そう？」

「（本当に早くしなくちゃな。そのためにも……）」

俺はそんな事を考えながらスーパーへと向かった。

第3話（後書き）

感想コーナー

今回感想をくれたのは

『ムギユウさん』

『桜さん』

『海斗さん』

です。

感想頂けて私はとても感謝しております。これからこんな駄作を呼んでいただければと思っております。

この後も感想など随時募集中です。

もうかれこれ1ヵ月以上前になりますが関東大震災にあわれて亡くなった方が大量に出ていると聞いております。その方々には心からご冥福をお祈りしております。

第4話（前書き）

最近忙しくて書く隙が……（^| ^;）
駄文ですがどうぞm（| m

第4話

あれからさらに数日がたち、今日もまた普通に学校へ行き授業を受け、放課後となっていた。

「うし、今日の授業も終わった。さくさく帰ると……」

「星見、ちょっと待てくれ。」

俺は教室を出ようとしたときに紅薔薇先生に呼び止められた。

「何ですか？俺これから帰ろうと思っていたところなんです。」

「呼び止めてすまないな。そう言えばお前が部活に入っていないことを思い出して、そこでお前がどこかの部活に入らないかと思ってな。」

「部活……ですか。俺としては家に帰るのが遅くなるのは嫌なんです。」

俺としては部活には所属せず、家に帰って例の研究を急ピッチで完成させたいのだが。

「つまり家に帰るのが遅くならない部活ならいいんだな？」

「はい……まあ……そう言うことになりますね。」

紅薔薇先生が俺のその言葉を聞き、目の色を変え話しかけてきた。

「それならちようどいい部活がある。私が顧問をしているんだが部員が今1名しかいなくて困っているんだ、もしよかったらその部活に入ってみないか？もう1人の奴には私の方から話しておくから明日の昼に放送室に行ってくれ。では気をつけて帰るんだぞ。」

そう言って紅薔薇先生は去っていった。

「あの・・・俺まだ何も言ってないんですが。・・・まあいいか、昼休みに放送室っていったな、行くだけ行ってみるか。」

次の日

俺は昼になってシアからいつも通り弁当をもらい、「今日は用事があるから」と屋上から放送室へと移動した。

「放送室って事は紅薔薇先生が顧問をしてるっていう部活は放送部なのか？」

俺はそんな事を呟きつつ放送室のドアをノックした。そうすると中から女の子の声が聞こえてきて

「開いてるんで入ってきてください。」

と言われた。俺はその言葉を聞きドアノブを回し放送室内へと入った。

「ようこそいらっしやいました。紅薔薇先生からお話は伺っています。どうぞそこの椅子におかけください。」

俺はそう言われ近くにあったパイプ椅子に座った。

「ではまず自己紹介から私の名前はデイジー、この放送部の部長をしています。まあ部員は私1人しかいないんですけどね。」

ん？デイジーだと？どこかで聞いたことがあるような………気のせいかな？

「はじめまして、俺は星見宋だ。よろしくな」

「じゃあ次にこの部活の活動内容を説明しますね。この放送部は基本お昼休みに放送したり、他にはその放送に関するアンケートをとったりしています。」

「そのお昼にする放送の内容はどんなのなんだ？」

デイジーは俺の質問に対して慌てた感じで近くにあった資料を見た。

「えーっですわね、たとえば音楽を流したり、前もって収録していたトークショウ的なものを放送していたようです。」

「していたようです、とは？」

俺はデイジーの文末が気になり聞いてみた。

「あ、それは私がこの部活に入ると入れ違いに先輩方が引退してしまっただけで1人では何もできず今は部活が休止しているような状態なので資料しか残ってなくて……」

なるほど紅薔薇先生はデイジー1人でこの部活を動かすのは無理と
考え俺をここに入部させたい訳か。しょうがないいつも家のバカな
父親が迷惑をかけていることだこれぐらいの話にはのってあげるか。

「そうか、わかった。説明ありがとうね。じゃあ今日はこれぐらい
にしようか、もう昼休みが終わっちゃいそうだから。」

「あ、はい。」

デイジーは、時間を確認しながら俺に返事をした。俺はそれを聞いて
席を立ててドアの方に歩いていった。

「じゃあまた明日も昼休みにここに集合ね。」

「え、それって……」

デイジーは俺をビックリした顔で見た。

「俺は放送部に入部するよ。」

「あ、ありがとうございます!!」

デイジーは俺にお辞儀してきた。

「そんな感謝されることないよ。俺は俺の好きで放送部に入るんだ
から。じゃあまた明日」

俺はそう言って放送室を出た。それと同時にチャイムが鳴った。

「しまった……弁当食いそびれた。あとで食うか。」

俺はそう呟きながら自分の教室へと戻っていった。

その日の夜

「これでいいところ完成か……」

俺は自分の部屋で術式が書かれた紙を手に使っていた。それはシア達との約束をはたすためのものであった。

「後は父さん、いや神王を説得するだけか。骨が折れそうだな。ソラいるか？」

「なんだい？」

俺の言葉を聞きつけどこからともなくソラが現れた。

「頼んでいた物の準備はどうだ？」

「もうできてる。何時でも使えるぞ。」

「そうか、面倒くさい仕事を頼んですまないな。」

「なにこれぐらいどうってことないさ。」

そう言ってソラは俺の肩にのかってきた。

「お前の方はどうなんだ？」

「俺の方も完成した。後はこじれた関係をどうにかするだけだ。」

俺はそう言ってため息をついた。

「ん？どうした？その問題にぶち当たるのは最初からわかっていた事だろ？」

「いやそうなんだが、実際に直面するとかなり面倒くさいなと思っ
てな。」

「かと言ってやらないわけではないだろ？お前の大事な妹たちの運
命がかかっているのだから。」

「当たり前だ。俺が何のためにこうしてやってきたと思う？全ては
妹たちを自由にするためだ。もう少しでどうにかなるのにこんな些
細な壁に邪魔されてたまるか！」

俺は力を込めてそう言いはなった。

「それでこそ宗だ、期待してるぞ。」

そう言い残すとソラは初めからそこには何も居なかったかのように
消えてしまった。

「じゃあ行くとしますか。」

俺は部屋を出て神王の下に向かった。

「父さん、話がある。」

俺はそう父さんに話しかけた。

「宗、どうした？」

どうやら俺の空気を読んでくれたらしく真剣向き合ってくれた。

「俺が何のために研究を続けてきたか知ってるよな？」

「ああ。」

「術式が完成した。後はシア達と父さんから許可をもらうだけだ。」

「……………」

俺の言葉を聞き父さんは黙ってしまった。

「何を悩んでいるんですか？」

「いや……………」

父さんはなにかを言いたそうにするが止めてしまう。

「どうせ神王家に魔族の娘が居ることが不味いとも考えているの
でしょう？」

「っ！それをわかっているならなんで俺に許可をもらいにきた？お
前なら許可をとらずともやれるだろう。」

父さんはそう俺に聞いてきた。

「そうですね。ですけど俺が目指してるのは妹たちを幸せにする事です。そのためには貴方の父親の了解が必要になるんだよ。」

「俺は……」

父さんはまた黙ってしまった。

「まあ今すぐに答えを出せっていうのは無理でしょう。だから1週間待ちます。」

俺のその言葉を聞いても父さんは黙ったまんまだった。俺はそんな父さんがだんだんとじれったく思えてきた。

「聞いてますか？1週間待ちます。その間に決心を固めてください。」

俺は返事が無いのにつのらせていたイライラがついに爆発し父さんの胸ぐらを掴んで怒鳴った。

「聞いてんのか神王！？俺はお前に聞いてんだ！！1週間待つ、その間に自分の心を固めろ、王としての自分、父親としての自分、どちらでもいい。ただこれだけは言っておくサイネリア母さんと結婚した時点でどうなるかぐらいはわかっていた事だろう？1週間後にあんまし意気地なしな事を言うようだったら俺はお前を許さないからな。」

俺は掴んでいた手を離し自分の部屋へと向かった。

「よし、これぐらいでいいだろう。」

今俺の目の前には家出のための荷物があつた。

「じゃあ行くとしますか。」

俺は1週間家出をする事にした。本当ならば家出などする予定ではなかったのだがあまりにも父さんが不甲斐ないので見ていたくなくなったのである。それに俺が家出をすれば決心がつきやすくなることだろう。俺がそんな事を考えながら歩いていたら玄関につく途中である人物に遭遇してしまった。

「お兄ちゃんこんな夜遅くにそんなに荷物持ってどこ行くの？」

それはシアであつた。まずいここでシアに会うのはなるべくよしなかった。

「ああ、ちょっとな。1週間程度家に居れなくなったんだ。」

その言葉を聞きシアはビックリしたようで俺に詰め寄ってきた。

「私そんなの聞いてないよ！なにがあつたの！？」

シアは俺の服を掴み半分泣きながら聞いてきた。俺はそんなシアをギュッと抱きしめた。

「すまんシア。こんな事になる予定じゃ無かったんだが、これもおまえ達のためなんだ………許してくれ。」

俺はシアに眠りの魔法をかけ眠らした。

「本当にごめんな。」

俺はシアを部屋に運んだ後、家を出た。

第4話（後書き）

感想コーナー

今回感想をくれたのは

『紅さん』

『ムギユウさん』

『桜さん』

感想ありがとうございます。感想いただきそれを読むことによって私は書く力が出ます。できる事ならこれからもこの小説を読んでくれると嬉しいです。

次回の投稿は早くなるか遅くなるか検討がついていません。ですが恐らく今回ぐらいまたはそれ以上に遅くなる可能性があります。なのでゆっくり次の更新を待ってもらえると嬉しいです。

第5話（前書き）

6月中に更新しようと思ったのに7月になってしまった・・・。

第5話

俺は、家を出るとそこには瑠璃ちゃんが居た。

「宋さん・・・本当に出て行かれるんですか？」

不安そうな顔で俺にそう聞いてきた。

「なんだ、聞いていたのか。なら話は早い、たかだか一週間くらいだ。ちよつとした旅行気分で行ってくるさ。」

そう言って、瑠璃ちゃんに笑って見せた。

「で、ですが住む場所はどするんですか？」

「なに、ホテルにでも泊まるさ。さもないければ野宿でもするかな。

ま、瑠璃ちゃんが心配しなくても大丈夫だよ。」

俺は、そう言い瑠璃ちゃんの隣を通り過ぎようとした。

「待ってください！」

瑠璃ちゃんはそう言って俺の腕を掴んで、俺のズボンに入っていた携帯を取った。そして自分の携帯と同時にいじった後、俺に返してくれた。

「宋さんの携帯に私の連絡先を登録しておきました。なにかあった場合そこに連絡をください。」

「あ、ありがとう。」

俺はあまりのことにビックリしてそうとしか言えなかった。

「ちゃんと無事に帰ってきてくださいね。」

「あ、ああ。……じゃあ行くな。」

俺は、そう言って歩き出した。

と言って出てきたのはいいんだが、そこら辺のホテルに泊まってる
と父さんやシアにみつかりそうだな。かといって遠くに行けば学
校に行けなくなってしまふ。さてどうしたものか。俺は、駅前のベ
ンチに座りながらこの先どうしようかと考えていた。

「あら？そこに居るのは宋さんではありませんか？」

そう俺に声をかけてきたのはカレハだった。

「カレハ？どうしてこんな時間にこんなところに？」

時間はすでに夜の8時を回っており、基本優等生のカレハが遊び回
っているとは考えにくい。

「私ですか？私はアルバイトの帰りですわ。それより宋さんこそど
うしてこんなところに？」

「俺か？俺は、その……ちょっと家出をしてきたところかな？」

俺はそう気まずそうに言った。

「そうですか。家出をしてきたんですか。」

カレハは、いつもどおりの笑顔のまま言った。俺はそんなカレハに驚いた。

「あれ？カレハ驚かないの？」

「宋さんほどの人が単純な理由で家出なんてするはずがありませんわ。」

「随分と俺のことを大物に見てるんだね。」

俺は苦笑いをした。

「そうだちょうどいい。カレハ、この辺で学校から近すぎず遠すぎない位置にあるホテルとかしらないか？」

俺は、俺よりこちら辺に詳しそうなのでカレハにそう聞いてみた。

「あら？どうしてそんなことを聞くんですか？」

「どうしてって、明日も学校はあるから遠くへ行くことはできないし、かといって近くに居ちゃ家出とは言いにくいだろ？」

まあ学校に行ける位置に居る時点で遠くとは言えないんだけどな。

「そうですね……………」

俺の言葉に納得したのか、カレハは考え始めた。そして数分後に衝撃的な答えが返ってきた。

「その、もし宋さんが良ければなんですが…………私の家に来ませんか？」

「はい？」

俺は、返ってきた答えに耳を疑った。

「ただいまー」

「おじゃまします。」

俺は今カレハの家に来ています。なぜこんな事になったかというところ、あのカレハの提案に対して俺がどうしようかと考えているとさらにカレハからこんな事を言われた。

『あの、非常に言いにくいのですが…………早く決めて頂かなければ終電が…………』

そうカレハの家は電車に乗らなければいけない位置にあるらしく、さらに終電の時間が迫っているというものだった。俺はそんな状況

で出した答えがこれだった。理由はある。これから電車に乗って適当なところまで行ったとしてもホテルがあるかどうかはわからない。しかも終電に乗るのが前提のため、もしなかった場合野宿になってしまう。俺としては術式の最終調整やらその他諸々があるため野宿はさけたかった。だからカレハの家にお世話になることに決めた。

「どうぞ宋さんお上がりになってください。」

俺はカレハに促され家に上がらせてもらった。すると家の奥から足音が聞こえてきた。

「お姉ちゃん、おかえ・・・り・・・」

奥から出てきたのは女の子だった。その女の子はカレハの事をお姉ちゃんと呼んでいるあたりを見ると妹なのだろう。カレハとは違い活発そうな感じがする女の子だ。その女の子は俺の事を見て固まっていた。どうしたのだろうか？

「あ、ツボミちゃんただいま。こちらの方は宋さんです。」

「どうも、初めまして。星見宋です。」

「初めまして、ツボミです。」

そうカレハの妹、ツボミちゃんは挨拶を返してくれた。だがツボミちゃんの様子は心此処にあらざといった感じだった。そして様子が元に戻ったと思いきや家の奥に走っていつてしまった。

「俺、なんかまずいことしたかな？」

「いえ、特にしてないと思いますけど。」

俺はそのあとリビングに通された。そこにはカレハの両親がおり、俺の事を見てびっくりしていた。どうやら世間では俺はまだ死んだことになってるらしい。まあ時を見て親父は発表するつもりなんだろう。まあそんなこんなでカレハの両親に事情を軽く説明したところ俺が泊まる事を快く了承してくれた。なんだか説明してる途中から奥さんは上の空になり周りに花畑が見えたが旦那さんとカレハ曰くいつものことらしいので心配しないことにした。その後はお風呂をに入らせてもらい、夜も遅くなってきたということで部屋に案内してもらい部屋の中で荷物の整理をしていた。

「えーと、明日の授業はっと・・・」

俺が明日の授業の準備をしていると部屋のドアがノックされた。

「はい。」

俺がそう言ってドアを開けるとそこにはパジャマ姿のカレハが居た。

「遅い時間にすみません。ちょっとお聞きしたいことがありますて。」

カレハは真剣そうな顔で俺にそう言ってきた。

「廊下じゃ寒いだろうから部屋の中で話そう。」

俺はカレハを部屋の中に招き入れた。

「で、聞きたい事ってなんだい？」

「その・・・家出してきた理由をお伺いしたくて。」

「理由かそう言えば話してなかったね。簡単に言えば親父と喧嘩したからかな。」

「それだけですか？」

カレハは、俺に疑いの目を向けてそう聞いてきた。

「まあ喧嘩の理由が難しい話になるんだけどね。」

「難しい話ですか・・・。」

「ああ、親父が今の地位を無くしてしまいかねない程に・・・ね。」

カレハはこの言葉に驚き目を見開いた。

「それでも理由を聞きたいかい？」

俺はそんなカレハにそう言った。カレハは少し悩んだ後、頷いた。

「じゃあこれから話す事は誰にも話さないでね。」

そして俺は話し始めた。シアの中にもう一人のシアが居ること、そのシアが魔族の血を濃く受け継いでること、その事が世間にばれる事により親父にどんなことが起こりうるか、そして俺がシアともう一人のシアを分離させようとしてることを、カレハは口を挟むことなく静かに俺の話を聞いていた。

「……と言うことだ。だいたいそんな感じでしびれを切らした俺が家を飛び出てきたって感じた。これじゃあ実際、喧嘩とも呼べないけどな」

「そんなことが、ですがなんでそんなリスクを犯してまでシアちゃん達のことを？」

「今の俺があるのはシア達のおかげだから……かな。」

「それはどういった……」

「ここからは俺の昔話をしよう。」

そう言って俺は昔の話を始めた。

第5話（後書き）

感想コーナー

今回感想をくれたのは

『ムギユウさん』

感想ありがとうございます。感想は間違ってる点や気になる点など、いろいろ募集中です。

次回の更新は今回より早くなるように努力していきたいと思っています。

第6話（前書き）

かなり眠たい中書いたので酷い内容になってると思います。

第6話

「そうだな……じゃあ俺が親父に拾われた辺りから話そうか。」
俺はゆっくりと思い出すように話し始めた。

「あれは今から12年、いやいなかった分を含めると22年位前のことだ。」

俺は5才の頃に世間一般で言うところの神隠しにあった。まあ実際は何らかの原因によって引き起こされた次元の裂け目に吸い込まれて違う世界に飛ばされたって事らしいが、俺はその時にたまたま神界に飛ばされた。飛ばされた俺が最初に居たのは森だった。そしてその森で数日間さまよって、大きな家を見つけたんだ。俺はその家に助けを求めた。で、そこにいたのが旅行に来ていた親父、つまり今の神王ユーストマだったってわけだ。最初は大騒ぎだったよ、神族ではない俺がいきなり現れて。俺は周りを神王の親衛隊に囲まれて尋問をされそうになったところを親父が駆けつけて来てこう言った『デメエらはこんな子供になにしてんだ!？』ってね。俺は衰弱しててそこで意識を失った。気がついたのはそれから一週間ぐらいしてからだった。それからは大変だった何で俺がここに居たのか、俺は何者なのか、俺の目的は何なのかをしつこく聞かれたよ。でも俺はその時はまだ5才でみんなが何を言ってるかわかんなかった。そんな中、親父だけが俺の名前を聞き、体の事を心配してくれた。俺はそんな親父に安心感を覚えた。それからさらに一週間がたって親父達が帰ることになったんだ。まあその時にはすでに俺は神隠しにあって、こっちの世界に飛ばされて来たって事はみんなわかってたから俺に優しくかったから良かったんだけど、やっぱり一番最初に俺に優しくしてくれた親父が居なくなるのは寂しくて嫌だった。だから俺はいじめてたんだ。そしたら親父は俺のところに来て『俺の息

子にならないか?』って聞いてきたんだ。俺はビックリした。周りにいた人達もビックリしてたけど。だけど俺は嬉しかったよ、だから俺は『うん!』って答えた。

んで俺は、晴れて親父の養子になったと言うわけだ。それから俺は次期神王の子供として育てられ始めた。まだ5才だったという事もあって教えられることを次から次へと覚えていったよ。さらに1年がたって親父が正式に神王に即位したのと同時に今の母さん達と結婚、その頃からだったかな俺が神界と魔界の共同研究施設に通うようになったのは、最初は好奇心で入って行ったんだがだんだん居心地が良くなってきて入り浸るようになった。そしてさらに1年がたちシアが生まれた。このときは大はしゃぎだったな、なんと言っても自分に兄妹ができたことが嬉しくて仕方がなかった。そこからは何事もなくいつものように研究所に行ったり、シアの面倒を見たりして過ごしていったよ。そう言えば気づいたらプリムラが研究所に居たな。そして俺が15才の時に転機が訪れた。門が開いて親父が人界に行くって言ったんだ。そこで俺は自分の親がどうしているか調べてきてくれて頼んだ。そして人界から帰ってきた親父から衝撃的な事実を聞いた。

俺の親は死んでいたんだ。

俺が神隠しにあってからたった半年後、俺を失った事により母さんは精神不安定になってしまい自殺、父さんはその後を追って首つり自殺。俺はそれを聞いた後、途方にくれた。そして生きる活力を失って屍のようになった。一日をただ無気力に生きていく、そんな生活が続けること約1年ぐらいした頃だったいつものようにふらふらと夕食をとり食堂に行って自分の席について少したら食事が運ばれてきた。だけど運ばれてきた料理はいつもと違うものだった、つつけば今にも崩れてしまいそうな不格好なハンバーグだったんです。一瞬呆気にとられ、ふと隣に顔を向けた。そこには手にたくさんの

絆創膏をつけて心配そうな顔でこっちを見てるシアが居たんだ。そこで俺は気づいたこれは俺を心配したシアが怪我をしながら作ってくれたものなんだと。そしてそれがわかった時、俺にはまだ俺のことを大事にしてくれる大切な家族が居るんだと実感して涙が出てきた。俺がいきなり泣いたことにビックリしたシアはあたふたしてたな。

それからの俺は今までの事がなかったかのように明るく暮らしていた。そしてある時シアと遊ぼうと思ってシアの部屋に行ったときにあるものを見てしまった。それは鏡に向かって話をしているシアの姿だった。俺はそれを不思議に思いシアに話しかけてみた、そうすると帰ってきた言葉はいつもと違うちよっと乱暴な言葉だった。その後、俺はその子からいろいろ聞いた。実は生まれるはずであったもう一人のシアであること、自分は魔族の血の方が強いこと、親父に生まれてくることを望まれなかったこと。それを聞き俺は衝撃を受けた、自分がこんなに事になってるのにも関わらず俺のことを気にしてくれた事に。だから俺は約束した絶対に裏シアを俺の妹として認めさせる事を。それからの俺はシアを分離させるための研究に精を出した。俺は気づけば研究成果から神童なんて呼ばれていた。そして俺は実験の最中に起きた魔力の暴走で異世界に飛ばされた。

「だから俺はシアの事を諦めるわけにはいかないんだ。」

「そうですか。そんなことが・・・」

「ま、カレハが気にする事じゃないよ。これは俺の問題だ。」

「ですが・・・」すこし話しすぎたかな、もう夜も遅い寝るといい・・・はい。」

「お休み、カレハ」

「お休みなさい、宋さん」

カレハは少しシュンとした様子で部屋を出て行った。

「そう、これは俺の問題だ。俺が解決しなくちゃいけない。」

俺はそう呟き眠りについた。

第6話（後書き）

感想感謝コーナー

今回感想をくれたのは

『ムギユウさん』

です。

感想ありがとうございます（≡▽≡）

感想だけでなく誤字脱字などについても募集しています。

次の更新は仕事が忙しくなるため3ヶ月以上先になると思います。
なので気長に待っていたけると嬉しいですよ（≡▽≡）

第7話（前書き）

予定より大幅に遅れ、さらには年を越してしまった。
本当にすみませんでした。

第7話

「ふぁ〜〜〜」

「宋さん昨晚は、ゆっくり寝れませんでしたか？」

俺は昨日カレハの家に泊まり、今は学校に登校中だ。

「いや、そんなことはないんだが、最近は睡眠時間が少なかったから疲れが抜けてなくてね。」

「そうなんですか。やっぱりそれはシアちゃんの事で、ですか？」

「まあね。でも心配してもらうほどの事じゃないさ。それに俺の事は、俺が一番わかってるから。」

「……あまり無理はしないでくださいね。」

「カレハは心配性だな、大丈夫これぐらいじゃどうにもならないさ。ああと、それより今日もカレハはバイトあるんだろ？」

俺はこれ以上この話題を続けるとカレハによけい心配をかけるんじゃないかと思ひ違う話題をふってみることにした。

「はい、今日もシフトが入ってますわ。」

「そうか、じゃあ今日は学校が終わった後どうしたものか。」

「先に帰られてはいかがですか？」

「うーん、でもな・・・」

「では、フロアで私のアルバイトが終わるまで待っていますか？」

「でも、それだと店に迷惑がかかるだろう？」

「店長には私の方から言っておきますわ。」

「そうか？・・・なら、そうしようかな。」

「あ、それとこれを。」

カレハは、そう言って手に持っていたものを渡してきた。俺はそれを受け取った。

「カレハこれは？」

「お弁当ですわ。」

「いや、そりゃ見たらわかるけど。頼んでいないのにどうして？」

「迷惑でしたか？」

カレハは、涙目になりながらそう聞いてきた。

「い、いや。全然だよ！助かった。」

俺は涙目のカレハを見て慌ててそう答えた。

「それはよかったですわ。」

その後は、軽く話をしていると学園に着いた。

「じゃあまた放課後に玄関で。」

「はい、わかりましたわ。」

そうして俺とカレハは玄関で別れた。さて問題はここからだ教室に行けばシアと合うことなる、そうならば確実に問いつめられるだろう。どうしたものか……。そうこう考えているうちに教室の前についてしまった。よし、決めた。問いつめられたら素直に答えよう。もし怒られたとしても甘んじてそれを受けよう。

「みんな、おはよう。」

俺はいつもの調子で教室に入る。そうすると教室にいたクラスメイトは挨拶を返してくれた。そして肝心のシアはというと、俺を見るなりこっちに走ってきた。

「おお、シア。おはよう。」

俺はいつも通りに接してみた。だが実際、内心何を言われるかとハラハラしていた。

「もう！おはようじゃないでしょ！何で昨日あんなことしたの！気づいたら朝で、お兄ちゃん居ないし、お父さんは元気ないし、さーんさんだったんだから！」

シアは俺に向かってそう怒鳴ってきた。

「それに家の中何処探してもお兄ちゃんが本当に居なくて、またお兄ちゃんが居なくなっちゃったのかと思って。私・・・わたしい・・・」

シアはそう言うところぼろと涙を流し始めた。

「そっか、そっか。ごめんな、不安にさせたな。」

俺はそう言ってシア優しく抱きしめた。そうするとシアは俺に抱きつきわんわん鳴き始めた。それは紅薔薇先生が来るまで続いた。

昼休み

とりあえず俺はあの後シアに今、誰に世話になっているかだけは話しておいた、一週間したら帰ると言ったらなんとか納得してくれた。まあ迷惑をかけるなど念は押された。あと父さんには俺が何処にいるかは話さないと約束してくれた。と、まあそんな感じでどうにかなったわけだがシアを泣かせたことは反省しなければならぬ。そして俺は今昨日の約束で放送室に来ている。

「さてじゃあ今日は放送部の活動として俺たちが何をしていくか話し合おうか。」

「はい。」

「とりあえず前にいた先輩方が何をしていたか知りたいんだけど資料見せて貰える？」

「えっと、これをどうぞ。」

デイジーは資料を渡してくれた。まあ資料と言っても活動日記なんだが。

「えっと、どうやら先輩方は週に二回昼休みに校内ラジオをやってみたいだね。」

「あ、はい。一応それ残ってる見たいんですけど。」

デイジーはそつとカセットを差し出してきた。

「今時カセットって……まあいいか。とりあえずこれは今度聴いてみよう。」

それからとりあえず活動日記をぺらぺらと読んでいったが校内ラジオ以外は活動はないようだった。

「よし、だいたいわかった。俺としては先輩方と一緒に昼休みの校内ラジオをやっていければいいと思うんだけど。デイジーはなにか他にやってみたいことあるかい？」

「いえ、とくにないです。」

「よし、じゃあこんなところで今日はやめようか。そろそろ昼休み終わりそうだしね。」

デイジーは俺にそう言われて壁に掛けてある時計を見た。

「あ、そうですね。じゃあ明日も昼休みに。」

「そうだね。」

そういつて俺とデイジーは放送室を出た。

「そうだ、デイジーさ、俺に遠慮しなくていいからね。」

「え、いや、そんなことは。」

「そうか？なんか遠慮してるような感じだからさ。」

デイジーは、俯いて何も言わない。

「ま、無理にとは言わないけど。同じ学年だし、部活のメンバーなんだからさ。」

デイジーは俺の言葉に軽く頷いてくれた。それから会話もなく各々のクラスにもどった。

放課後

授業を終え俺は玄関に来てカレハを待っていた。

「遅れてすみません。掃除当番だったもので。」

カレハは走ってきたのだろうか、少し息を切らしながら俺に言ってきた。

「いや、全然構わないよ。むしろ申し訳ないくらいだ。」

「そんな、申し訳ないだなんて思わないでください。」

「そういう訳にもいかないさ、世話になってるんだから。」

「そうですか？まあ、とりあえずいきましょう。」

そう言ってカレハは歩き出した。俺もそれについて歩き出しカレハの隣に並んだ。その後は今日の昼になにがあったのかを聞きながら歩いていると気がついたらフロアに着いていた。カレハの話によるともう話は通してあるらしく一応、問題はないらしい。ただ何かは必ず注文して欲しいとのことだった。ま、それぐらいは当たり前だ。

「では、また後で。」

カレハはそう言って俺と店の前で別れた。とりあえず俺は店に入ることにした。店に入り何処に座ったらいいものかと考えていたら店長らしき男の人がこっちにやってきた。

「私がこの店の店長だ。君がカレハ君の言っていた、宋君かな？」

「はい、そうです。」

「そうか、じゃあとりあえずこっちに来てくれ。」

俺はそう言われてカウンターの端の席に連れて行かれた。

「とりあえず此処なら他のお客さんの邪魔にはならないからいつまで居てくれてもいいよ。」

「すみません。ご迷惑をおかけして。」

俺は店長さんに向かって頭を下げた。

「なに、うちの看板娘のカレハ君のお願いだ、聞かないわけにはいかないよ。」

店長さんはそう笑って返してくれた。なかなかこの人はいい人のようだ。

「ただちゃんと注文はしてくれよ?」

「はい、それはもう。」

「それならオーケーだ。じゃあゆっくりしていつてくれ。」

店長さんはそう言って奥に下がっていった。そしてちよつとするとフローラの制服に着替えたカレハが奥から出てきた。

「大丈夫でしたか?」

「ああ、カレハのおかげで問題なかったよ。ありがとう。」

「いえ、そんなことはありませんわ。」

「じゃあ早速注文いいかな？ ケーキセットを頼みたいんだけど。」

「わかりましたわ。」

カレハは笑顔でそう答えると奥に下がっていった。ちよつとするとカレハはケーキセットを持って出てきた。

「どうぞ、ケーキセットです。」

そう言つて俺の前にケーキセットが置かれた。

「ありがとう。」

「では、私は行きますね。」

「おう、頑張つてな。」

カレハは俺の言葉を聞いた後、そのままホールの方に出て行つた。さてカレハのバイトが終わるまでしばらくあるな、どうやって時間を潰そうか。俺は壁に掛けてある時計を見ながらそう考えていた。

「ま、のんびりしていればすぐに時間がたつだろう。」

そう思いケーキセットの紅茶を飲んでからケーキを食べようとフォーク取ろうとしたら、そこにあるはずのフォークとケーキなかった。

「なかなかのモノだな、ここのケーキは。」

と、隣から声が聞こえ、目を向けるとそこには青い着物を着た女の子がいた。

「勝手に人のケーキを取るなよ“ソラ”」

そう、今俺の隣に座っている着物を着た女の子は、あの“ソラ”なのだ。ソラはなんと人の姿にもなることができる。ただし基本獣の姿なので人の姿は魔力を消費するらしくあまりなりたくないらしい。

「ん、食いたかったのか？それならほら、あーん」

そう言ってケーキをのつけたフォークを俺に突き出してきた。

「いや、いいよ。」

俺はそれをやんわりと断った。

「なんだ、いらないのか？せっかくあーんをしてやったのに」

そう言ってソラはフォークを引っ込め自分で食べた。

「てか、ソラお前姿を表して大丈夫なのか？」

なんでも神獣はあまり人に姿を見せてはいけないらしい。理由はよく知らないが

「大丈夫だ、ちゃんと認識阻害の魔法を使っている。こっちから話しかけない限りわかりはしない。現にお前がここに座ったときから居たがお前は気づいたか？」

「ふーん、なら大丈夫か。」

「神獣を侮ってもらっては困る。ケーキおかわり。」

ソラはケーキが乗っていた皿を俺に突き出しなが言った。

「侮ってはいないさ。すみません、おすすめのケーキを二つください。」

俺は近くにいたウェイトレスに注文し、視線をソラに戻した。

「とりあえず、シアにはわかって貰えたからよしとしよう。」

「相も変わらずお前は妹のことが好きだな。あれだな、シスコンってやつだ。」

ソラは呆れたように俺を見た。

「まあ否定はしない。」

「少しは否定したらどうだ？」

俺の言葉を聞きさらに呆れたように言ってきた。

「否定はできないな、俺の今やってる事自体を否定しかねないからな。」

「ま、そうなんだがな。」

と言ってソラはくすくすと笑い始めた。

「何がおかしい？あ、どうも。」

俺はウェイトレスが持ってきたケーキをもらいながら聞いた。

「なんでもない。」

ソラはまだくすくすと笑っていた。

「何でもいいが、ほらおかわりのケーキだ。」

「おお、ありがとう。」

ソラは、俺からケーキを受け取り早速食べ始めた。それからソラとくだらない話をしながらカレハのバイトが終わるまで待った。カレハがバイトが終わってから一緒にカレハの家に帰った。

カレハの家

「今日お店で誰とお話されていたんですか？」

とカレハは寝る前に俺の部屋に来て聞いてきた。

「ん？何の話だ？」

俺は何を言っているかわからないか装いごましてみた。

「だって、宋さん今日お店で誰かとお話されていませんかでしたか？」

「いや、ずっと一人で居たけど。」

カレハは「気のせいだったのかしら？」と首をかしげていた。

「あ、そうだ。迷惑じゃなかったらでいいんだけど、明日も弁当作ってもらえないかな？」

俺はカレハにそう言った。

「全然迷惑などではありませんわ。」

カレハは、笑顔でそう答えてくれた。

「そうか、じゃあお願いするね。」

「はい。ではお休みなさい、宋さん。」

「お休み、カレハ」

俺の言葉を聞いた後、カレハは部屋に戻っていった。

第7話（後書き）

感想感謝コーナー

今回感想をくれたのは

『ムギユウさん』

です。

ムギユウさんには毎回更新するたび感想をいただけてすごい感謝しています。本当にありがとうございます。

感想だけではなく誤字脱字などについても募集しています。

次回の更新は今回以上に遅くならないようにしていきたいと考えていますがどうなるかわかりません。なので本当に気長に待って頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5584q/>

SHUFFLE！～帰ってきた男～

2012年1月10日21時46分発行